The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響について ： 戦前の女学校向け人形浄瑠璃公演を中心に
Author(s)	多田, 英俊
Citation	演劇学論叢. 2016, 15, p. 40-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響について

――戦前の女学校向け人形浄瑠璃公演を中心に――

多田　英俊

はじめに

昭和一〇年代は、文楽座を主体とする人形浄瑠璃や義太夫節が、ある種注目を浴びた時期である。例えば、当時少女の間で圧倒的な支持を集めていた宝塚少女歌劇において、義太夫節が取り入れられた公演が行われ[1]、娯楽の中心的存在であった映画では、明治期の三味線名人豊沢団平を主役とした作品が上演されるなど[2]、日頃人形浄瑠璃や義太夫節を見聞きしない人々にも、その存在は身近なものになっていた。時代とともに衰退の道を歩むかに思われていた人形浄瑠璃に、小さいながらも一つのブームとも呼べる現象をもたらしたもの、そこには、日中戦争前後の日本という特殊な社会情勢が背景として存在していた。すなわち、国家主義を国民に浸透させるための手段として、当時隆盛を極めていた西欧的娯楽を否定的にとらえ、日本文化や伝統芸能を称揚する方策が採られていたのである。当然のことながら、それは教育界においても同様であり、芸術鑑賞のような場においても、その影響は少なくなかった。

その一例として、昭和一〇年六月二九日に発会した財団法人大日本浄曲協会による、人形浄瑠璃寄付公演を取り上げて検討してみる。この公演は、女学校を主たる対象として人形浄瑠璃を無償上演し、情操教育に資することを主たる目的としたものである。無償上演であるからには、その費用は主催者側の協会が負担する。幾何かの寄付行為があったとはいえ、それをまかなえるだけの財力はどこにあったのか。それは、文部省すなわち国家による補助金の下賜である。これは、協会が財団法人の認可を受けることによって可能となったものであり、逆に言えば、許可を得るために文部省の意に沿った協会運営でなくてはならないのである。もちろん、女子の情操教

育に資するという点で、協会と文部省は最初から同じ方向性を有していたとも言えるだろう。しかしながら、財団法人としての協会設立の経緯を見てみると、やはり国家思想が協会の事業に直通せざるをえない状況がうかがえるのである。そこで、まず、財団法人大日本浄曲協会の設立に至る経緯を整理する。

一　財団法人大日本浄曲協会の設立

財団法人大日本浄曲協会（以下、協会と略記）の設立に至る経緯については、研数学館創立者でもある、協会常務理事の片山鬼作が、協会の機関誌でもあった月二回発行の新聞「浄曲新報」に、詳しく記している。[3]

協会の前身である大日本浄瑠璃義太夫協会の経営ならびに拡大強化について頭を悩ましていた片山は、大正天皇の従兄にあたり、協会の専務理事となる伯爵柳原義光等の幹部と相談し、財団法人設立に腹を決める。それには主務官庁の了解を要するため、まず実際に事業を行い、その実績を以て認可を得ようと考え、東京市内の高等女学校三校において、人形浄瑠璃寄付公演を行った。当該三校からは女生徒の感想文が寄せられたが、片山や柳原の予想以上に女学生は興味を示しており、しかも、人形浄瑠璃を精神修養の糧ととらえていたのである。[4]我が意を得た片山は、これら感想文を携えて文部省を訪れると、官吏側も、国粋芸術たる人形浄瑠璃の鑑賞による情操教育に賛意を示した。

これにより、協会は財団法人として発足するに至ったが、その発会式における各大臣の祝辞を見ると、「伝統的国民精神と密接不離」「国民思想の涵養陶冶」「国粋芸術の普及」「日本精神の鼓吹」等の言葉が散見される。[5]つまり、国家からの補助金の下賜を受けて運営される協会の事業内容は、国家思想を背景にした政府の姿勢や方針と合致することにより、安定的な経営が約束されるわけである。実際、財団法人許可後の第一回浄曲公演―神田区公会堂にて区内四町会一千余人を招待―においては、実演に先立ち、貴族院議員海軍中将佐藤鉄太郎を招聘し、「女子と日本精神に就て」と題して、半時間に及ぶ講演を行っている。その内容は、日本婦人はどこまでも日本婦人らしくあれと強調するものであった。[6]

では、この財団法人として出発した大日本浄曲協会の主たる事業である、女学校を中心とした人形浄瑠璃寄付公演が、どのように行われたか。また、情操教育の対象とされた女生徒はどのような感想を抱いたのか。これらを、協会機関誌「浄曲新報」の記事によって検討する。

二　大日本浄曲協会による人形浄瑠璃寄付公演

協会の人形浄瑠璃寄付公演規程によると、無料上演の目的として、イロハの三項目を設け、順に、演劇芸術としての人形浄瑠璃の実際研究、国粋芸術による青年子女の精神修養並に情操教育、日本精神に基く社会教育を挙げている。三点目は二点目を拡大したものと考えられるから、実質的には、研究と教育という二点に絞られる。規程前文にも、「本会は古典芸術の保存及び普及並に国粋芸術による社会教育の目的を達する為、左の規程により人形浄瑠璃の無料上演を致します」とある。(7)

ここで、まず押さえておかなければならないのは、協会が、保存や普及そして実際研究という、演劇芸術としての人形浄瑠璃そのものを第一に考えていることである。情操教育は人形浄瑠璃を手段として用い行われるのであるから、人形浄瑠璃にとっては二義的なものである。ただし、協会が情操教育を二義的にとらえているわけではない。つまり、協会としては人形浄瑠璃のすばらしさを現在はもちろん広く後世にまで伝えたいわけで、情操教育に役立つこともそのすばらしさのうちの一つということである。実際、人形浄瑠璃と情操教育とが完全一致しないことは、協会自身が認識しており、「女学生にも聴かせられる義太夫曲目」という形で、選定作業を行っている。「本協会では事業の一端として全国諸学校で、人形浄瑠璃を無料で寄付上演するのであるが、どんな曲目でも好いとはいえないところから、理事者間で、最も教育的なものを選び先ず左の三十一種を挙げ、これなら女学生に聴かせても弊害はないということになった」(8)との記事、そして、「本紙前号に発表した女学生にも聴かせられる義太夫曲目卅一種は外題だけで、これを見ただけでは果して何段目が情操教育に適するやの疑問が生ずる、外題卅一種の中で専ら語り物の内容につき風教上から見て社会教育に裨益ありと認めたもので、文芸上又は声楽上から見た価値は別である」(9)との記事を併せ読むと、むしろ、人形浄瑠璃を情操教育という範疇に押し込めるのは無理がある、あるいは、人形浄瑠璃は情操教育の範疇外に優れた芸術上の価値が見出せる、ということを表明していると理解できるのである。そしてこれは、協会幹部自身が語った記事にも表れている。「浄曲新報」発刊以来、連載記事となったものに、柳原義光の「浄曲の追憶」と片山鬼作の「私と協会の因縁」があるが、両者とも自身が浄瑠璃義太夫節を語る素人天狗であり、その内容も、題名からわかるように、浄瑠璃義太夫節に関係した自伝的性

格を帯びており、情操教育という視点から読み進めるには強い違和感を覚える。

このように、協会幹部の多くは、人形浄瑠璃という日本古来の伝統芸能の、無類の愛好家であった。そして、彼らはまさにそうであるがゆえに、人形浄瑠璃に描かれた世界を愛することにもなる。例えば、日本女性としての美しい特徴が廃れて行く風潮を嘆き（柳原）、娘には決して西洋かぶれの服装はさせなかった（片山）、等々の発言は[10]、その愛着が容易に国粋主義的情操教育の称揚や推進と結び付くことを示している。しかも、文部省からの下賜金を、その運営費の大部分に充当させるべく、財団法人としての認可を得た協会としては、国家の方策と歩調を合わせ、時には先鋭的な論陣を「浄曲新報」上に発表することにもなるのである。「オリムピックに際し／寺内陸相大和撫子に警告／浄曲精神こそ第一」を始め、「流行歌の泥海から／子供達を救う／専科教員を再教育して音楽の統制策」「低調卑俗極りなき／民衆娯楽の改善／愈々文部省が乗出す」「〝児童の口から流行歌を追え〟／小学校から排撃運動起る」という一連の見出し記事は[11]、この章の最初に述べた、協会による人形浄瑠璃寄付公演規程の目的三項目が、当時のニュースを格好の触媒として、自然と極端な形で現出したものと言えよう。多くの女学生に無償で人形浄瑠璃を鑑賞させ、その価値を広く知らしめるとともに、子女の思想を自ら善しとする方向へ、情操教育によって導く。これこそが、協会そして協会幹部の、最重要にして最大の望みだったのである。

では、実際に協会による青年子女対象の人形浄瑠璃寄付公演はどのように行われたか。女学校対象の公演について、その概要を一覧にして示す[12]。

表一　大日本浄曲協会人形浄瑠璃寄付公演概要一覧

年・月・日	上演演目[13]	実施対象校
10・10・09	十郎兵衛住家 政岡忠義	駒沢高等女学校
10・11・29	佐太村・寺子屋	東京女子高等師範学校
10・12・23	寺子屋	東京府女子師範学校 東京府立第二高等女学校
11・04・30	判官切腹 寺子屋	埼玉県立児玉高等女学校
11・11・07	竹の間・政岡忠義	山脇高等女学校
11・11・11	政岡忠義	武蔵野女子学院高等女学校
15・10・19	草履打・長局奥庭 十郎兵衛住家	国府台女学院高等女学校

いずれも、各学校において講堂等を会場とし、協会側が女学生の情操教育に相応しいと選定した演目を、素義（女

義も含む）の床に、地方の操り座の人形を合わせて上演された。これは、寄付公演ゆえに経費を抑制する必要があったためであるが、当時は素人浄瑠璃が盛んであり、地方の人形芝居も健在であったから、別段不審を抱くほどのことではない。実演の前には、学校側（主として校長）から挨拶等、協会側から、協会の使命と浄曲精神についての講話、人形浄瑠璃の観方についての解説等が行われた。協会側では、主として前者を柳原専務理事、後者を片山常務理事が担当した。これは、協会の無料上演の目的のうち、一点目の演劇芸術としての人形浄瑠璃の実際研究を片山が、二点目の国粋芸術による青年子女の精神修養並に情操教育を柳原が、それぞれ担当したことになる。実際の上演における学校側挨拶中、「さっき片山理事がいわれた、黒坊が一向邪魔でなくなるというのも（中略）さき程、柳原伯の言われた如く、人形浄瑠璃の中には、烈々火の如き犠牲的精神が強調されている事が多い」との発言にも合致する。[14] なお、プログラムやパンフレットの類は戦前のことでもあり残されていないが、「浄曲新報」第六号昭和十年十一月十五日付二・三面に、「女学校上演用浄曲解説」として「伽羅先代萩」（政岡忠義之段）が取り上げられており、そこには、本外題の成立年および作者、伊達騒動との関係、実在の人物との対比、外題名の意味、そして上演詞章と語彙注釈が掲載されている。

現在においても、団体鑑賞や古典芸能鑑賞という形で、人形浄瑠璃文楽はその対象となっており、プログラム配布や舞台上での解説は行われているが、それらに思想教育の跡を探し出すことは困難であり、寄付公演においても同断である。しかし、寄付公演における学校側の挨拶および協会側の講話には明瞭であり、生徒の感想文にも色濃く反映されている。そこで、次章から具体的に表一に掲げた生徒の感想文を取り上げ、考察を進める。

三　女学校生徒感想文の全体像

考察を始めるに際し、あらかじめ確認しておかなければならないことがある。「浄曲新報」に掲載された一校当たりの感想文数が、最大で山脇高女（以下、各学校名は識別可能な略称を用いる）の八二、最小で東女高師の五であること。ならびに、寄付公演を鑑賞した女生徒の総数が、前者で全校生徒約一三〇〇、後者が寄宿生約四〇〇ということである。したがって、紙上掲載率は一割未満であり、これは他校においても同様である。加えて、掲載された感想文は、学校側から提出されたものを、協会側が選び出したものであり、そこには何らかの基準がある。すな

わち、公演を行った学校および協会側に好都合な感想文を材料に、思想教育の影響を探ろうとしても、客観的かつ有意性のある結果は望めないのではないか。実際に鑑賞した女生徒の主流となる感想が、正しく反映されてはいないのではないか、との危惧を抱く。しかし、この大前提に関しては、次の点から問題ないと考えられる。

まず、「浄曲新報」には生徒の感想文全体に目を通した人物の所見が掲載されており、その内容と掲載感想文とを比較すると、特定の偏り無く、様々な視点から書かれた感想文を、その特徴ごとに網羅する形で選び出していることがわかる。

例えば、協会設立後初めての寄付公演である、駒沢高女の感想文二六編が掲載された紙面の最下段に、「感想文を読みて」と題された協会側の記事がある。これをそのまま引用する。[15]

人形浄瑠璃を初めて観た者が、どんな感じがするかは上掲した駒沢高女生徒の感想文を読んで大体観取することが出来る、義太夫なんか古臭いものが聴けるか……というのは若い人達の間に何のこだわりもなくいわれている言葉であるがそれが一度人形浄瑠璃を見ると大部分が一応は従来の考えを変えて来る、これは人形の動きに対する珍しさからで一度の感激を以てして義太夫の意義が解り趣味にまで到達したと考えるは少し早いように思われる

また、文楽座太夫である豊竹和泉太夫は、実際に文楽座を観劇し「その美しさ面白さを讃えた」感想文を提出した中学生一〇名に、偽らざる感想を聞いた結果として、「（一）人形浄瑠璃は考証という事を無視しているから不合理な点が多く史実的でない。（二）太夫の出演と人形遣いが目障りになる但し三味線は宜しいとの事。（三）人形の顔が無表情で且つ同じ様な頭が多いから興味がない。（四）丹下左膳又は机龍之助級の剣道の名人を取扱ったものが少ない。（五）太夫が何をどなつているのか不明で聞いている間に自然眠くなる」と述べている。[16]

これらに共通しているのは、人形浄瑠璃あるいは義太夫節に関して、青少年が抱く感想とその分析については、半世紀という時間を隔てた現在においても、ほとんど変わらないということである。事実、女学生の感想文中に、日頃親しんでいる娯楽として、映画やレヴューあるいは洋楽（ジャズ、クラシック等）を挙げる者は多く、人形浄瑠璃（義太夫節）の享受をめぐる状況は、初見の感動はそれとして、現在と同様厳しいものがあったのである。これを、

寄付公演を行った協会側からみると、目的のイに記された、演劇芸術としての人形浄瑠璃の実際研究という点に関しては、一部の愛好家を除き、一般への浸透はなかなかに難しいということになる。

「浄曲新報」には、一方で学校側の所見も掲載されており、中でも、児玉高女の校長によるものが、質量ともに充実している。とりわけ、「二、感想の要点を分類すると」として、八項目にわたり箇条書きにした内容は、感想文全体の傾向を知るものとして重要である。それを次に記す。[17]

イ、主催上演に対する感謝
ロ、協会の古典芸術、日本婦人尊重の御精神を理解し之に共鳴を感ずるもの
ハ、浮華軽佻なる趣味の流行、西洋カブレの現時の世相に対し憤慨せるもの
ニ、人形師の妙技に驚異せるもの
ホ、義太夫の語りぶりに感激せるもの
ヘ、出演者の熱誠、その神技の境地を味わい得たるもの
ト、劇内容を精細に観察し各場面に純情を動かし得たるもの
チ、大体的観察により武士道日本精神、婦人道徳、義理と人情等精神美を抽象論議せるもの
リ、劇場面の全体的観察によりその劇的妙味を味い得たるもの
ヌ、劇の主人公判官、由良之助、松王、源蔵等の心理を捉え悲歎落涙せるもの

ニ～ヘは前に引用した協会側の、いわゆる初鑑賞に伴う感動や感激に該当し、ト・リ・ヌはより深い鑑賞によるもので、いずれも現代の生徒による感想文とも通底する。イは地方初の寄付公演によるものである。注目すべきはロ・ハ・チで、上演された人形浄瑠璃（義太夫節）を耳にし目の当たりにした具体的内容とは、直接的に関係はない。つまり、これらの感想文こそが、芸術鑑賞における思想教育の影響が明確に現れた結果であり、実際に鑑賞した女学生の感想をそのまま反映したものなのである。

さらに、「浄曲新報」掲載感想文が、学校側あるいは協会側の思惑に合致するものばかりでなく、女学生の感想を公正に拾い上げていることは、批判的な感想文も同時に掲載されていることからもわかる。とりわけ、東女高師の五編はすべて批判的視点を含んでおり、文楽座ではないがゆえの三業の不一致や技術不足を的確に指摘しており、時代を掛け離れたものとする意見も複数ある。情

操教育という点からも、客観的には有効であると述べていて、公演する側からの主張となっている。もっとも、これは高等師範学校生徒という、卒業後は教育者という面が強く表れたものとも言えよう。なお、協会側も情操教育の有効性についてはあらかじめ議論しており、常任監事松崎実（明治大学教授）は、「芸術と道徳はカテゴリーが違う、或程度までは好いが、批判精神が出来て居るものに対して、芸術に依る思想善導は出来ない、批判力の無い青年とか大衆とかは或程度まで芸術に依って情操を導くということは出来る」と看破している。[18] また、寄付公演ではないが、素義の義太夫節（素浄瑠璃）を聞いた女生徒の感想文を掲載するにあたり、「面白くなかった所謂共鳴しないという意見をも併せ掲載して愛義家への参考に供した」として、「感じなかった」との別枠見出しで分類した紙面もあるのは、[19] 義太夫節の良さを多くの人に知ってもらい、愛好者を増やしたいという、協会側の思いが率直に表れた結果とみてよいだろう。

このように、「浄曲新報」に掲載された、人形浄瑠璃寄付公演を鑑賞した女学生の感想文は、人形浄瑠璃（義太夫節）そのものに関しては、現代青少年が抱く感想と大差ない内容を、一方、情操教育に関しては、当時の思想を如実に反映した内容を、それぞれ含んでいる。では、次章から、思想教育の特徴的な影響について、各校女学生の感想文を分析かつ整理しながら、考察を進める。

四　特徴的な影響（一）―古き伝統・国粋芸術―

まず、典型的な感想文（駒沢高女二年生）を左に掲げる。[20]

これらは実に日本精神（大和魂）を良く表わし、忠と孝との道を明らかにし、日本女性の精神を発揮して居る私達外国の国に流れやすき今日、非常時の世をこの古代精神を手本として益々日本的精神をかためなければならぬと感じました

各校女生徒の感想文に満遍なく現れ、その出現数が感想文総数において三割を占める項目が、「情操教育」（女性に特化したものも含む）の範疇に属するものである。これは、学校側および協会側が寄付公演の目的として掲げた最たるものであり、校長の挨拶や柳原専務理事の講話中においても言及されているものである。しかも、前章で述べた東女高師は例外として、そのすべてが自身のあり方、振る舞い方として、教訓的にとらえている。次に、二割を占めたのが「日本精神」および「古典伝統」に関した

もので、「国粋芸術」そして「洋物批判」に類するものも一割以上あった。古くから日本に伝わる伝統的な人形浄瑠璃、という感想は、知識としてあるいは当日の挨拶や講話で耳にして、容易に記されるものである。それが、日本精神という語に結び付き、修身道徳的な響きを帯びるところに、この時代の特徴がある。「国粋芸術」という表現は、女学生自身から自然発生的に生み出されるとは考えられない。第一章で言及したように、時の大臣の祝辞には用いられ、「浄曲新報」中にも散見されるから、明らかに指導者の側から降りてきた言葉を生徒がそのまま用いているのである。「洋物批判」も、第二章の新聞記事見出し等からして、指導者側の思想である。前章で見たように、女学生達が日頃慣れ親しみ、楽しみとしているのがまさに洋物であるから、「古典伝統」中に現出する「日本精神」を尊重することを、自己批判の形で積極的能動的に表現した結果である。ちなみに、自己批判でない場合は、当時の洋物流行に対する世情批判という形をとり、これもほぼ一割に達する比率である。

その中にあって、掲載感想文の過半が言及するという高比率を示しているのが、駒沢高女における「日本精神」、児玉高女における「情操教育」である。これは、学校側の姿勢が大きく関与していると考えられるので、個別に分析をする。

駒沢高女における寄付公演の記事には[21]、校長（山上曹源）の挨拶が掲載されており、その中に、「本校設立の趣旨は、浄曲協会が日本精神を宣揚せられんとする御趣旨とはからずも相一致していまして」とあり、さらに、実演後同校生徒有志による「国舞君が代」が催されている。これは、蝶を象った古代衣裳の舞姫五人が国歌君が代斉唱に合わせて舞うもので、同記事は「真に健全なる日本婦道精神を表象し」と称している。掲載された二六編の感想文で、実演された人形浄瑠璃（義太夫節）そのものに関してのみ記した七編を除く一九編中一四編に、日本精神への言及があるというのは、思想教育が、芸術鑑賞に大きく影響した結果とみてよい。それは、実演に際しての挨拶や講話はもちろんのこと、日常の教育現場において、思想教育が浸透していたことの反映なのである。なお、引用感想文中にある「非常時」の語は、駒沢高女の生徒二人が別に用いており（この他は児玉高女に一例あるのみ）、右記と絡んで強く印象に残ったものと考えられる。

児玉高女の場合も、前章に示した校長の、分析による項目に加え、注17にも転載した通り、平素の情操教育による成果が感想文の至る所に見えることを満足に思う、との総括が、生徒の芸術鑑賞への影響を、如実に現して

いる。感想文においても、二六編掲載のうち一九編が「情操教育」に言及しているのである。この、東京市外の地方高女において、寄付公演が行われたことは、校長を中心とした学校体制に拠るところが大きい。実は、「浄曲新報」に三回にわたり「田舎漢の義太夫観」なる投稿記事が掲載されているのだが、その寄稿者山田耕作は児玉高女の職員なのである。さらに、その第一回冒頭には、「国粋的我が浄曲は古典芸術であるのみならず、民衆的国民精神教養上頗る有意義、そうした見地より之をヨリ良く教育的に扱って行くべき筋のものと信ずる。」と記されている。[22] 寄付公演は、まず学校側が依頼し、それを受けた協会側が実施の可否や順番を決定するから、児玉高女の場合、思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響は、甚だ大きかったと言わざるを得ないのである。

五　特徴的な影響（二）――一家団欒・海外進出――

前章では、各校女学生の感想全般に見られた特徴について述べたが、ここでは、特定の項目が部分的に現れている二点について述べる。

一つは、山脇高女における、父母や家族に言及した「一家団欒」とでも称してよい感想文群であり、全一八件中一六件が山脇高女に集中している。これは、人形浄瑠璃寄付公演の鑑賞に際し、母や姉兄から事前に説明を受けたり、事後に家族と感想を含めて話題とするというものである。もちろん、各校の感想文が鑑賞直後に提出させたものか、翌日以降に書かせたものかは、明確に判断できない以上、山脇高女が後者であった場合、前者であった他校に比して、家庭での事後感想が一定数あるのは当然であろうし、さらに、当時は家庭や家族の重要性が徳目として定着しているから、特徴として取り上げるまでもないとも考えられる。しかし、山脇高女以外で言及している二件が、「父の心がよく分りました」[23]（駒沢高女）、「今は母と一緒になって浄瑠璃の話をして居る」[24]（児玉高女）であることを考えると、やはり、山脇高女に特徴的な教育方針、あるいはそれを体現した担当教師による指導によるものとせざるを得ない。なぜならば、前記感想文群は実際に鑑賞した人形浄瑠璃（義太夫節）の内容とは直接関係のないものであり、生徒各人の心に響いた感動や印象をそのまま書き付けたものではないからである。逆に言うと、家庭や家族に言及する場合は、このように書くより他はないのである。さらに、感想文群は、掲載されている一・二年のい組～ほ組における偏りは見られないため、学校側の教育思想が現れた結果と考えられる。

そこで浮かび上がるのが、多数の著書を有し当時の子女教育に大きな影響力を示した、山脇高女の初代校長山脇房子である。寄付公演の前年に死去してはいたが、公演後の一周忌には御一年祭ならびに胸像除幕式が挙行されており、影響力は依然衰えていない。その代表的著作である『若き女性に贈る』に、「仮に父も母も、兄も姉も、食卓を囲んで面白い話に花を咲かせたとしたら、よし山海の珍味はなくとも、どんなに美味しく食べられるでしょう。単に子供だけと限らず、家中がどんなに明るく幸福であり得ることでしょう。」と記されているのである。[25] これが、全一一章の第三章に位置していることから（第一章は歴史上の女性、第二章は田園の女性に特化した内容）、子女教育の最も重要な項目として、一家団欒が該当していたと言えるのである。

次は、寄付公演で鑑賞した人形浄瑠璃（義太夫節）を、世界との関係でとらえた感想文である。これは、学校教育の独自性に基づくものではなく、寄付公演が実施された時期によるものである。具体的には、昭和一一年一一月の山脇高女、武蔵野女子学院高女が該当する。ただし、七編を数えるのみで有意性を持たないと判断すべきかもしれない。しかし、それがこの時期の感想文に集中して現れているところから、その理由を探る価値はあると思われる。まず、感想文に記された表現を示すと、「人形浄瑠璃は日本が世界に誇ってよい立派な芸術」「我が国粋芸術として世界に誇れる物」「此のような世界にほこる芸術」「人形浄瑠璃こそ日本の世界に誇れる芸術品」「人形浄瑠璃がもっともっとよく世間に広まり世界の国々にもしれわたるようになればよい」（以上、山脇高女）「もっともっと世界の人々にこのお話を伝えなければ」「日本人の人情味の機微の表現を海外にまでも紹介したい」（以上、武蔵野女子学院高女）となる。[26] ここで留意したいのは、国粋芸術などの人形浄瑠璃の芸術性や、人情の機微などの内容への言及自体、前章でも指摘したように、他校の感想文に頻出であるにもかかわらず、それを世界に誇り広めるべきもの、すなわち対外的にとらえた書き方は、この時期に集中していることである。もちろん、両校とも寄付公演を対外性と関連づける必要などない。とすれば、これらは生徒個々人の自然な表現ではなく、時代性に基づいた協会側の講話などによって、影響を受けたものとするのが妥当である。

この時期の「浄曲新報」には、柳原専務理事による南洋視察関連の記事が連載され、柳原の所論を「我が国の永遠の大国策としての進運発展策は平和的生産主義に基き南方に進出するにあり」と紹介し、[27] 帰朝後は詳細な視

察談を連載している。また、第卅三号昭和十二年一月一日付二面には、「本協会事業の国際化／陽春を期し実現せん／古典芸術の粋・人形浄瑠璃を在留諸外人に提覧」との見出し記事が掲載されており、そこには「国際文化振興会と連携」として、柳原が理事の一人を務める同会を「我国の文化を諸外国に紹介して、日本と云うものの認識を深める有意義な事業を行っている」と説明している。[28] もちろん、政府の対外積極策がそのまま生徒の感想文へ反映されたとするには無理がある。しかし、同時期に宝塚少女歌劇で上演された作品が「海外進出を目的とした歌舞伎レヴュウ「恋に破れたるサムライ」」であったことを考え合わせると、[29] 寄付公演における人形浄瑠璃鑑賞に、世界有数たる日本芸術の世界伝播という感想や主張が加味されることは、協会側の講話内容も推測され、決して突拍子もないことではなく、思想教育の間接的結果として、十分考えられるのである。

おわりに

財団法人大日本浄曲協会による人形浄瑠璃寄付公演は、前章に記した武蔵野女子学院高女の後、ほぼ四年間実施されていない。これは、昭和一二年七月に起こった盧溝橋事件以降を、政府が支那事変による非常時局と位置付けたため、協会も、「当分の事業として専ら浄曲精神の講演を行うこととなり」、[30] 人形浄瑠璃寄付公演を自粛することにしたからである。財団法人化に伴う国家からの補助金下賜は継続しているが、第二章に見た、多くの女学生に無償で人形浄瑠璃を鑑賞させ、その価値を広く知らしめるという、協会幹部の理想は、他ならぬ国家の政策に則り、その実現を断絶せざるを得なくなった。再開は、昭和一五年一〇月の国府台高女であったが、従来の学校側からの要望ではなく、柳原専務理事の紹介によるものであり、[31] 次年度の寄付公演も同校で行われている。なお、この時期に再開された要因の一つに、「本協会では時宛たかも紀元二千六百年の奉祝すべき年に当り芸能祭の催しに呼応して浄曲の種々なる催しを行うことに幹部間では種々協議が進められている」との記事が挙げられる。[32]

こういう状況下で人形浄瑠璃寄付公演を鑑賞した感想文には、思想教育の影響が濃厚に見受けられるはずであるが、意外なことに、掲載数三二編中二〇編が人形浄瑠璃（義太夫節）そのもののみを取り上げており、第三章以下で検討した用例も、古典芸術としてとらえるもの、義理人情を感じ取ったものがほとんどすべてであった。つまり、現在の生徒においても普通に見られる、義理人情

の世界を描いた古典芸能たる人形浄瑠璃を鑑賞し、率直な思いや感動を述べるという内容なのである。その原因は、現在で言うところの事前指導にあった。上演外題各段の詞章を事前に読ませ、それらの梗概を掴ませた上で、[33]当日上演前に、協会文芸顧問である日本大学教授飯塚友一郎による、人形浄瑠璃に関する講演を、一時間余を費やして行ったのである。[34]これが効果的であったのは、感想文中にも八編において事前講話への言及が見られることからもうかがわれる。女生徒が直接作品に触れて率直な読解を進めるとともに、適切な指導・助言が与えられるという形態。協会の理想は、この寄付公演において最もよく実現を見たことになるのである。

本考察を終えるに当たり、最後に触れておきたいことがある。思想教育の影響とされた女生徒の感想文は、協会側や学校側に配慮した優等生的作文であり、本心からのものではない、とする考え方についてである。影響を受けたフリをしているだけだ、と。しかし、そこにこそ思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響が如実に見て取れるのではないか。表面的形式的にせよ肯定するということは、思想教育を行う側からすれば、自らの方向性が正しくかつ賛同されたものとなる。そして、鑑賞文に記された内容は、思想教育の成果とされ、以後の芸術鑑賞にとって更なる掣肘となるのである。「浄曲新報」は、第百八号昭和一七年七月一五日付までしかその存在を確認できていないが、以後、芸術鑑賞を含め学校教育や日本全体がどのような方向へ進んで行ったかは、ここで詳述する必要もないであろう。

前述の飯塚友一郎は、国府台高女での第二回講演を「時局と芸能」と題して行った。その最後の部分を引用し、[35]本論攷の擱筆とする。

「汚いものを美しくする。精神と技術、それがわれわれの文化ということに他ならない。文化というのは、そういう価値の高い生活を求めることであります。」

注

(1)「東宝の快挙／一月のレビウに浄曲を挿入／綾千代猿玉両女義が出演／作詞小林社長・作曲猿玉師」(「浄曲新報」第卅一号昭和十一年十二月一日付一面)。

なお、「浄曲新報」は旧字旧仮名での記載であるが、本論攷における引用表記は、その他の文献も含め、すべて新字新仮名に統一し、ルビは省略した。また、見出しは改行を／で示した。

(2)「〝浪花女〟が推薦映画に」と題した記事に、「浄曲三絃の名人団平にテーマをとった松竹劇映画浪花女(引用注…監督溝口健二)

は九月十九日から一般公開となった」とある。（「浄曲新報」第八十七号昭和十五年十月十五日付三面）。

（3）「私と協会との因縁」（「浄曲新報」第七号昭和十年十二月一日付三面より十一回連載）。

（4）紙上に掲載された生徒の感想文を引用する（「浄曲新報」第九号昭和十一年一月一日付六面）。なお、引用に際しては個人氏名を省略する。

精華高等女学校　五年生

「浄曲というものは年寄とか国学愛好者の慰み物に過ぎない」という風に考えていた私は、今度の二三の実演ではじめてそれが間違いであることを知った。

美しい親子の情とか主君に対する忠節とか、古来の我国民性を織込んだのが浄曲の本体であることを

関東高等女学校　四年生

浄瑠璃、それは聞いただけでおよそ私達には縁のないものである様に思い、唯ラジオによって聞く浄瑠璃以外にそれをしんみりと聞いた事もなく、また実際に見たり聞いたりしたとはいうまでもなくない私は、十二月廿二日に学校講堂に於て催された人形浄瑠璃こそ私の最初に見たものでした。そしてそれが自分が嘗て想像していた浄瑠璃とはその趣きを異にしたものであるのに驚かされた。何故といえば、浄瑠璃とは老年に至ってから聞くもので私達には聞いてもその面白味、趣きがわからないものであるとのみ考えていたが実際に私達が見ていかにそれが面白く感ぜられ又精神的修養にもいかに関係があるかを見出す事が出来たのでした。

品川高等女学校　四年生

レビューをみたからと言って身についている悲しい事苦しい事、総ての責任は逃れたとは言えない。唯このレビューと言うものは瞬間的の喜びであってその価する所と言ったら、殆ど無いと言ってよい位だと思う。然しこの我が国の浄瑠璃を考えた時、私達は壇上に立つ先生から色々とお話を聞くそれ以上に大教訓を聞いた様に思いその時代の精神を思い起しつつ又心に銘じつつ共に泣き共に悲しみ喜びとする事が出来た。

（5）当時の内閣が、人形浄瑠璃（義太夫節）と国体思想とをどのように関連付けていたかを知る資料となるので、「浄曲新報」第一号昭和十年九月一日付一面記事「発会式に於る大臣の祝辞」の一部を転載する。

文部大臣　松田源治

（前略）

義太夫節ハ本邦音曲中ノ尤ナルモノデアリマシテ緩急自在ノ妙音ハ切々トシテ人情ノ機微ヲ穿チ惻々トシテ聴衆ノ肺腑ヲ衝クモノガアリマス　加之数百年来広ク江湖ニ行ワレテ我ガ伝統的国民精神ト密接不離ノ関係ヲ有シテ

居リマス
サレバ国民娯楽ノ一芸術トシテ社会教育上ニ重要ナル地歩ヲ占ムルノミナラズ善ク之ヲ運用スレバ文教ノ普及ト相俟ッテ国民精神ノ作興ニ資益スル所蓋シ少カラヌモノガアルノデアリマス（以下略）

内閣総理大臣　岡田啓介

（前略）浄瑠璃義太夫ハ国粋芸術ノ尤ナルモノデアリマシテ古ク都鄙ヲ通ジテ広ク愛好セラレ国民思想ノ涵養陶冶ニ貢献スル所モ少クナイノデアリマス今回此ノ振興奨励ノ為メ大イニ力ヲ尽サレルコトニナリマシタコトハ国粋芸術ノ宣揚ト言ウ芸術的ノ見地ノミナラズ国民思想善導ノ上カラ申シマシテモ大ナル意義ヲ有スルモノト信ズルノデアリマス（以下略）

内務大臣　後藤文夫

惟ウニ芸術ノ世道ニ影響スル時ニ政教ニ超ユルモノアリ益アラバ即チ聖賢ノ化ニ匹ス古来浄瑠璃義太夫ノ世ニ貢献スルトコロ正ニ然リ然ルニ近年他ノ芸術ニ比シ是ガ萎靡沈滞ノ傾向アリシハ寔ニ遺憾トセン所ナルガ今回大日本浄曲協会ガ財団法人トシテ認可セラルルト共ニ愈々コノ国粋芸術ノ普及向上ニ力メ益益日本精神ノ鼓吹ニ尽力セラレントスル洵ニ慶賀ニ堪エザル所ナリ（以下略）

（6）当時の軍人政治家の思想を知る材料として、「浄曲新報」第三号昭和十年十月一日付一面に、「〝女らしく〟／女子と日本精神に就て／貴族院議員海軍中将佐藤鉄太郎氏講演」として掲載された前半部分を転載する。

世の中に色々な国はあるが、日本の婦人位優れた婦人を持つ国はない。その日本の婦人が、近頃では何んでも西洋風がよいというのでその真似をするのは考えものではないか。

×

「らしい」という言葉がある。これは如何なるものへも応用出来る言葉で、これを押進めて行くところに向上がある。併し、女の男らしいのは男の女らしいのと大差はない。日本の女はどこまでも日本の女らしく行かなければならない。日本の婦人が優れているというのは女らしいからである。女らしいというのは西洋の何んとなく個人主義的で薄情なのに反して、日本のそれは人情深く涙もろいのである。それが日本婦人の大きな特長である。

×

人世の幸福は温みがあることである。それは情愛が深く濃やかであるということである。併し、ややもすれば情に捉われることがある。これはたしなみを越えるからで、女らしくあるべき情愛もたしなみを忘れてはならない。（以下略）

(7) 人形浄瑠璃寄付公演による情操教育が、在籍生徒の家庭へも周知されていたことは、次に示す感想文（「浄曲新報」第卅一号昭和十一年十二月一日付四面）からも見て取れる。

山脇高女二年

先生から廻って来たプリントを見ると「拝啓益々御清祥段奉賀候」云々の次に情操教育ということが有った。情操って何かしらと思って字引を引くと「高尚なる感情」とあった。少女歌劇等に夢中になる今の軽薄な女学生を浄曲によって、もっと上品な高尚なものにしようという深いお考えなのだと思った。

(8) 「女学生にも聴かせられる／義太夫曲目／先ず三十一種を選択」（「浄曲新報」第一号昭和十年九月一日付七面）。

(9) 「女子に聴かせるに／情操教育に用うる義太夫三十一外題／どこがいいのか?」（「浄曲新報」第二号昭和十年九月十五日付二面）。

(10) 「私と協会との因縁3／常務理事片山鬼作」（「浄曲新報」第九号昭和十一年一月一日付六面）中に、以下の記載がある。

（前略）現専務理事柳原伯爵は
日本婦人の美しいところは、内輪で足を運び、畳の上を歩くのに踵を出さぬというたしなみがある。それが洋服を着て、殆んど素足に近いような靴下をはき男のように外輪で歩く、これでは日本女性としての美しい特徴が廃れて行くこの風潮に鑑みても是非日本主義的な情操教育をしなければならない
斯ういう伯爵のお説に私も全く同感でありまして、私は亡くなった娘に決して西洋かぶれの服装はさせませんでした（以下略）

(11) 本文に引用した見出し順に、「浄曲新報」での掲載面を示す。第廿四号昭和十一年八月十五日付三面、第廿七号昭和十一年十月一日付一面、第廿八号昭和十一年十月十五日付一面、第四十一号昭和十二年五月一日付一面。

(12) 「浄曲新報」のうち所在が確認されている号数は、第一号から第八十九号、および第百二号から第百八号である。したがって、欠落している第九十号から第百一号および第百九号以降の発刊時期における、寄付公演の有無については不明である。なお、表一以外に、感想文が掲載されていない女学校生徒対象公演として、11・12・18東京家政専門学校がある。

(13) これらは、協会が選定した外題と段とに一致している。そのうち、「浄曲新報」に詳細な選定理由が掲載されているものを、以下に転記しておく。なお、掲載面を段名の下に括弧で示した。

竹の間の段（第二号昭和十年九月十五日付三面）
此段懲悪の理法を誨うるに、八汐の奸策立所に露わるるの脚色を以てしたり。又若君が乳母政岡の教訓を守り、沖の井の勧めし膳を斥けし言動、及び政岡を庇いし言句、腕白ながら仁慈深きを示す。末段沖の井が正々堂々たる弁護の辞は聴く者をして粛然たらしむるものあり

政岡忠義の段（同前）

政岡の忠烈はいわずもがな、千松と鶴喜代とが殊勝なる言々句々皆これ武士たり。謀叛に加担せる八汐が、非業の最後を遂ぐるに至っては、適切に勧善懲悪の理法を誨うるものなり

寺子屋の段（同前）

白太夫の子三人兄弟の中松王一人不忠と見えしは松王が苦肉の計略にして更に敵に加担して菅公の為に図れるなり、而して誠忠無二の松王が一子小太郎を身替りとせる義烈、小太郎が幼少ながら喜んで若君の身替りとなり、潔よく首差伸べたる哀情、源蔵夫婦が身命を賭して若君に伝ける苦衷、皆これ臣たるものの亀鑑とするに足る。源蔵が他人の子を身替りとし、然もその母をも一刀の下に斃さんとしたるは時代思想と見ば止むを得ざることなるべし。大義親を滅すとは之の謂か

四段目判官切腹の段（同前）

忠臣蔵中最も深き感動を与うるはこの段と、九段目山科の段となり。副上使薬師寺の罵詈に対して判官が「兼ての覚悟見すべし」とて大小羽織を脱ぎ捨て、用意の白小袖、無紋の上下、死装束を見する壮烈、判官の衷情を察する上使石堂右馬之丞の同情、殊に本段の主人公たる由良之助が主君判官の最期に多く他を言わずして「唯御最期の尋常を願わしゅう存ずる」といえること、何等の悲哀ぞや御台所が婦女子ながら判官の切腹を目前に見て些の未練なる言動なかりしは壮、由良之助が若士の議を斥けて「足利殿に何恨有って弓引くべき」は正義というべし

長局の段（第二号昭和十年九月十五日付四面）

この段、徳川時代には、毎年三月諸家の奥女中宿下りの時節においては、必ず演ぜられし由にて、主人に忠実なる言句所作一として婢僕の亀鑑にあらざるはなく、寓話を以て主人を諫むる衷情、誰か一掬の涙なからん。中老尾上が岩藤のために罵詈せられ、然も草履を以て頭を打たれしをも忍びし克己忍耐はお初の言葉にもある如く忠臣蔵の判官に勝ること万々なり

(14)「教化芸術としての浄瑠璃／挨拶に代えて／塩田良平」（『浄曲新報』第九号昭和十一年一月一日付五面）。

なお、この記事の最後にある編輯部註には、「右の一文は去月十四日二松学舎専門学校の依頼により実地教授の目的で（中略）上演した際同校教授塩田良平氏が挨拶として述べられたものを特に乞うてここに掲載した」とある。

(15)「浄曲新報」第七号昭和十年十二月一日付四面。

(16)「情操教育としての人形浄瑠璃」（『浄曲新報』第九号昭和十一年一月一日付八面）。

(17)「生徒の感想文を読みて／埼玉県立児玉高等女学校校長足立武樹」（『浄曲新報』第十九号昭和十一年六月一日付四面）。

ちなみに、この所見には、思想教育と芸術鑑賞との関係がどのようなものであり、それを当時の教育者がどのように考えていたかを知る項目が最後にあるので、以下に転載する。

七、平素情操陶冶訓練指導上、意を用いて居る日本人としての婦徳の要領を理解していることがこの感想文の至る所に見え、或は感想として或は議論として相当深刻な迫力のあるもののあったことは最も満足に思うところである

八、平素の指導精神の確立を予件として説明を加えて理解せしめ、然る後上演を観ることに於てその効果があると信ずる

(18)「財団法人大日本浄曲協会主催／浄曲座談会／その二」(「浄曲新報」第四号昭和十年十月十五日付二面)。

(19)「順心高等女学校生徒感想文」(「浄曲新報」第四十一号昭和十二年五月一日付四面)。

(20)「浄曲新報」第七号昭和十年十二月一日付四面。

(21)「第六回浄曲寄付上演を／駒沢高女で挙行す／同校自慢の国舞も披露」(「浄曲新報」第六号昭和十年十一月十五日付一面)。

(22)「浄曲新報」第四号昭和十年十月十五日付三面。

(23)「浄曲新報」第七号昭和十年十二月一日付四面。

(24)「浄曲新報」第二十号昭和十一年六月十五日付四面。

(25)『若き女性に贈る』(女子文化叢書、大日本聯合婦人会・大日本聯合女子青年団、昭和九年九月、一二頁)。

(26)「浄曲新報」の掲載紙面は、山脇高女が、第三十号昭和十一年十一月十五日付四面、第卅一号昭和十一年十二月一日付四面、第卅四号昭和十二年一月十五日付四面、の三回にわたり、武蔵野女子学院高女が、第卅三号昭和十二年一月一日付六面である。

(27)「柳原伯爵の／南洋視察／三日に横浜出帆」(「浄曲新報」第廿七号昭和十一年十月一日付二面)。

(28)参考として、『財団法人国際文化振興会昭和十年度事業報告書』(財団法人国際文化振興会、昭和十二年三月、七頁)に「序」として記されている、昭和十一年四月十一日国際文化振興会創立記念日での、樺山資紀理事長演説要旨の冒頭段落を転載しておく。

国際文化振興会は昭和九年四月十一日財団法人として呱々の声を挙げたのであるが、この会の設立せらるるに当っては種々の要件があった。即ち第一は、我国が近年まで外国文化の吸収に急なために自国の文化を顧みるに暇がなかったものが最近に於て漸く自己を顧みる余裕を持ち、其処に幾多価値ある独自の特徴を再発見したことである。第二は、世界各国が国家主義の政治外交方針を採るに至り此等は文化方面にも影響して世界的気運となり、我国の施政者にも文化の対外宣揚を考えしめたことである。第三は、満州事変以来政治、外交、経済の方面に於ける我国の画時代的飛躍が世界の興味を喚起し、列国民の日本研究心を刺戟したことである。第四は、一般識者が我国の対外的政治、外交、経済の難局打開には我

国情及び文化を諸外国民に認識せしめ、彼我文化の協力を計ることが急務であることを感知したからである。また第五は、内外の如上の情勢と必要とを看取して我国朝野の先覚者が日本文化の振興及び海外に対する宣揚を重要なる国策の一とせられ、政府の政策に之を掲げられたからである。

(29)「歌舞伎レヴュウ「恋に破れたるサムライ」について／演出者として　坪内士行」の冒頭部分を以下に引用しておく。(「歌劇」昭和十二年一月、新春特輯号、第二百二号、歌劇発行所、一四頁)。

皇紀二千六百年祭もいよいよあと三年と迫りました。社会の他の諸方面の仕事と相並んで、日本の演劇演芸も次第に国内の力を充実した余力を海外に発展させ、天晴れ世界的舞台に活躍せんとしつつあります。誠に目出度くも嬉しい現象です。実現はどうか危ぶまれるものの、とにかく六代目菊五郎の欧州遠征が企てられ、国際劇場、国立劇場も熱心に主張され、世界演劇文化展覧会の大計画も行われつつあると伝聞する時、小林校長の此の海外進出を目的とした歌舞伎レヴュウ「恋に破れたるサムライ」の新作発表は、時も時、人も人として、内外人の注目の的となるのは当然のことで、我等宝塚関係者は一段と肩身の広い思いがします。

(30)「時局に鑑み専ら／浄曲精神の講演／当面・本協会の事業方針」(「浄曲新報」第五十号昭和十二年十月一日付一面)。

(31)「秋季に於る本会の諸事業／学校方面上演や地方進出」(「浄曲新報」第六十六号昭和十五年九月十五日付二面)。

(32)「政府から五たび／補助金下付さる」(「浄曲新報」第七十八号昭和十五年一月十五日付三面)。

(33)「学校向け上演二校／一、上智大学に於て「寺子屋」を／二、国府台学院で「加賀見山」を」(「浄曲新報」第八十七号昭和十五年十月十五日付一面)。

(34)「〝人形浄瑠璃を観て〟／国府台女学院／高等女学校生徒感想文」(「浄曲新報」第八十八号昭和十五年十一月十五日付四面)。

(35)「時局と芸能【四】／【国府台学院高等女学校に於る第二回講演】／飯塚友一郎」(「浄曲新報」第百六号昭和十七年五月十五日付三面)。

※本論攷は、独立行政法人日本学術振興会平成二七年度科学研究助成費（奨励研究）として採択された、課題名「思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響について――戦前の女学校向け人形浄瑠璃公演を中心に――」の研究成果として、公表するものである。